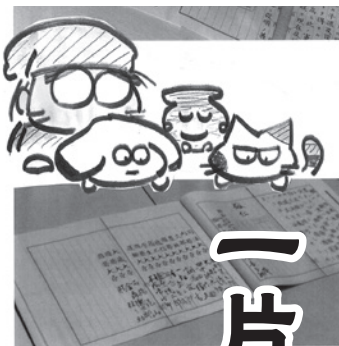




一片の氷、 玉壺にありや？

公文書界隈を徘徊する

福井 ひとし

第七回

楽園は何処に

戦前の科学技術政策

本稿の紹介

唐の詩人・王昌齡は赴任先の辺地から、友人たちに言い送った。「一片の氷心、玉壺に在り」（おれは、ひとかけらの氷のように透明な心を、玉のように穏やかな精神の中に入れた——そんな澄み切った気持ちで今はいる）と。

そんな気持ちでいることは、欲望や悩みに汚れた生身の人間には簡単ではない。しかし、文書にサインや押印

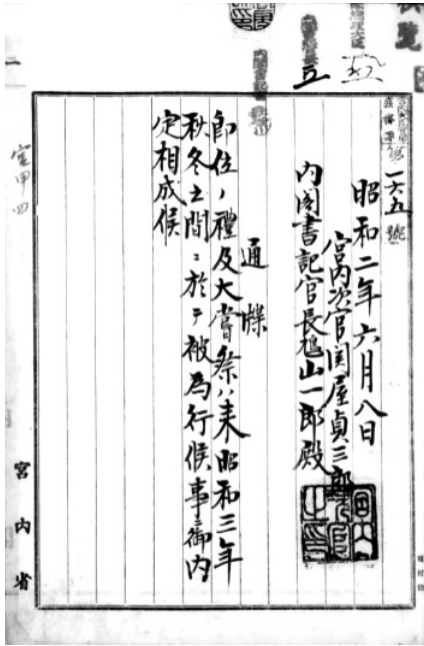
する、その一瞬の中になら、透明なものが見つかるかも知れない。過去の歴史の一面に、誰かの透明な思いが残っているのではないか。・・・と思って、公文書の森を徘徊します。今日は何か見つかるでしょうか。

ノーベル賞の季節

一〇月には、二〇二五年度のノーベル各賞受賞者の発表がありました。生理学・医学分野で坂口志文博士、化学分野で北川進博士が受賞。おめでとうございます。今回もまた京都大学の関係者だということですが、京都大学、あるいは京都という土地は、ノーベル賞と相性がいいんで

しようか。特に、我が国の最初と二人目のノーベル賞受賞者が、旧制中学から大学卒業後数年間、京都の同じ学校・教室で学んでいたというのは、世界的にも珍しいことではないかと思っています。

一九四七（昭和二二）年度の受賞者・湯川秀樹博士（一九〇七年生まれ）と、一九六五（昭和四〇）年度の受賞者・朝永振一郎博士（一九〇六年生まれ）は、同じ京都一中、旧制第三高等学校、京都帝国大学で学び、帝大時代は同じ



①「公文類聚」第五十二篇・昭和三年・第一ノ一卷「皇室一・即位大礼」中「即位礼及大嘗祭ヲ来ル昭和三年秋冬ノ間ニ於テ行ハセラル」（昭和二年六月八日宮内庁発出文書）

物理学科玉木研究室で、さらに卒業後は同研究室の「無給副手」として、本当に「机を並べて」いました。（中学時代までは朝永が一学年上ですが、湯川は中学四年時の高校進学を選び、以降同級生に。生年月日調べると朝永さんは三月三十一日生まれなので、同級生ということにあまり違和感なかったような気がします。）

ところでこの二人が帝大三年生（当時の大学は三年制）として卒論に（おそらく）苦しんでいるころ、京都の町では大きな行事がありました。①をご覧ください。

昭和三年秋、昭和天皇が一月一〇日に京都御所で即位礼を挙行、一月一四日から一五日にかけて京都で大嘗祭が実施されることになりました。

なお、①は宮内次官から内閣書記官長への「通牒」です。発出者の関屋貞三郎は大正一〇年から昭和八年まで、一二年間宮内次官を務めています。受け取った内閣側の花押は、内閣総理大臣は田中義一、内閣書記官長は鳩山一郎。「内閣書記官」としてハンコを押しているのは内閣総務課長・長谷川越夫さん。関東大震災時の総務課長として、内閣総理大臣不在（加藤高明死去）時に対処した事務方責任者。昭和一四年から貴族院議員を務めますが、これは官歴ではなく、新潟県が多額納税者互選で当選しています。長岡の「長谷川家」といえば今も重要文化財・長谷川家住宅が遺り、同県でも屈指の大地主だったそうです。



②文部省記録班分類文書「博覧会展覧会雑載」大正一二年～昭和一五年中「大禮記念京都大博覧会に後援方」(昭和三年七月十七日付け)添付図。図画工作のつもりで(編集のひとの迷惑かえりみず)数枚のスクリーンショットを貼り付けてみました。あんまりぴったり行きませんね。



③大阪毎日新聞昭和三年九月二〇日。総見出しは「天に在りては棚引く瑞雲、地に咲く花は博覧会」。いい見出しですね。

即位大禮記念博覧会と「学天則」

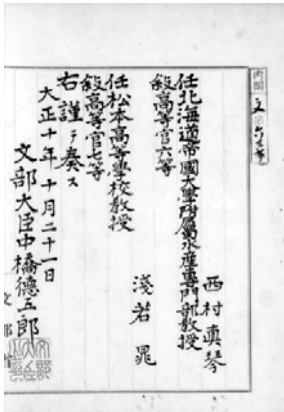
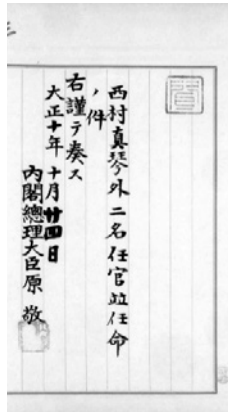
この大禮を記念して、市内岡崎公園にて「京都博覧会」が開かれます。京都市が主催し、国(文部省)が後援する、という形で開催されたようですが、この博覧会には「東洋初」の人造人間「学天則」がお目見えしています。西会場の第一参考館にいたとのこと。

この人造人間「学天則」の設計者・西村真琴さんは、昭和の名優・西村晃さんのおやじです。昭和六三年封切りの映画「帝都物語」では息子がおやじの役を演じて評判になりましたが、この当時、大阪毎日新聞の顧問。「学天則」も毎日新聞が出品したものでしたそうです。「学

天則」は、瞑想や文字を書く真似をする、など、役に立たないことしかできませんが、当時欧米の工場に進出しはじめたロボットを労働から解放する、と言うのがコンセプトだったそうです。（荒俣宏「大東亜科学綺譚」）

しかし解放すべきはロボットよりまず人間だったのかも・・・。

西村博士は、もともとマリモの研究などで学位を取った北海道帝国大学教授です（④）。



④任命裁可書 大正十年任免卷四八「西村真琴外二名任官並任命の件」

帝大教授を辞めて大阪毎日に入社したというのが、大正から昭和にかけて、朝日新聞に入社した吉野作造や柳田国男らの例も含め、一つのキャリアデザインだったのかもしれません。

ちなみに、④で同日に松本高校教授になっている浅若^{あさわか}晃^{あき}さんは地理学者で、この年、赴任した松本高校で進路に悩む一人の学生に、東洋史を学ぶように助言しています。その学生は浅若の助言に従い、京都帝国大学文学部に進みました。後の文化功労者、東洋学者、宮崎市定^{みやざき いちただ}さんです。（宮崎「自跋集——東洋史学七十年——」）

二人の学徒

すみません、博覧会の話はいつの時代もおもしろいので、ついつい話が寄り道し過ぎました。人造人間なんてわくわくしてしようがありませんが、湯川さんと朝永さんは、お二人の自伝を見ても、この展覧会を見に行つたようがありません。当時の帝大の理系のひとが卒業論文を書いているところですから、あんまりヒマは無かったのかと思います。

大学卒業後、二人の無給副手は三年間机を並べ、やがて別々に進みはじめます。昭和七年、朝永さんは東京の理化学研究所の仁科芳雄^{にしなとみ おお}の研究室に招かれ、湯川さんは京大の講師になり、昭和八年から新設の大阪帝国大学の講師（九年から専任）になりました。

朝永さんは、後の回想の中で、この時期の理化学研究所は「科学者の自由な楽園」だったと言っています。この研究所には後に湯川さんも参加するのですが、本当にそこに楽園があったのでしょうか。他のところには無かったんでしょうか。今回の「徘徊」は、昭和戦前期の「科学者の楽園」探しをしてみようと思います。

当時の学術界

ところで、毒ガス兵器が登場し、「化学者の戦争」といわれた第一次世界大戦の終わり（大正七（一九一八）年には「科学」が重要だという声が高まってきていたそうです。また、大戦後、それまでのドイツの科学界の覇権が崩壊し、共同研究の枠組みなどを作るために、新しい学術国際機関の設立が求められるようになりました。

この時期、既設の帝国学士院に加えて、学術研究会議、理化学研究所が設置されました。また、昭和二年に、内閣に資源局と資源調査委員会が置かれることになります。日本は「科学研究の振興に關してかずかずの手を打」（広重徹「科学の社会史」）ちはじめていたのです。

帝国のアカデミー

近世から欧米に設立されはじめた科学者のアカデミーと

して、我が国では、明治一二年に創設された東京学士会院が存在していました。これが明治三九（一九〇六）年に改組されて帝国学士院となり、文系（三〇人）に加えて科学・工学部（三〇人）が出来て、万国学士院連合会に加盟（明治四〇年）します。明治四四（一九一）年から皇室下賜金をもとに「恩賜賞」の授与を開始、民間からの寄付をもとに研究費補助も始まります。大正年間に会員の勅任官待遇、貴族院議員枠設置（四人も）など、学士院の存在意義は強まっているように見えます。これこそ「楽園」では。

朝永さんが東京に出てきたころは、

加賀出身の化学者・櫻井錠二さくらい じょうじ院長の下で、昭和六年に

研究補助機関の必要性の訴えを取りまとめ、これに應じて昭和七年一月に学術振興会が設立されてい

ました。

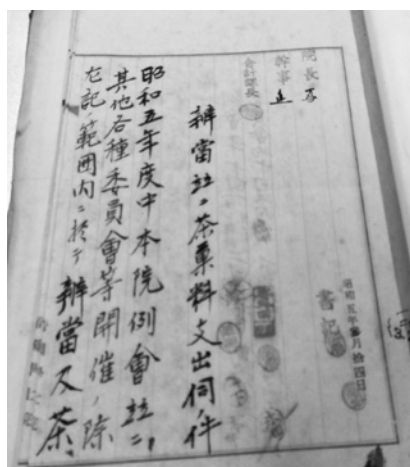
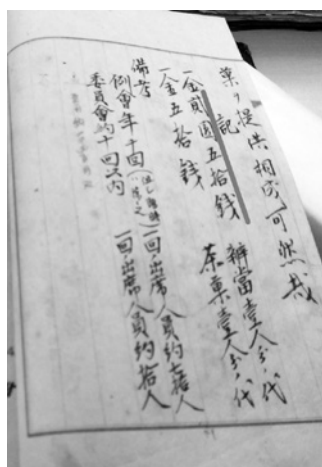
ちょうどその時期の帝国学士院の「諸伺」という文書

（⑤。残念がら未



⑤帝国学士院「諸伺」昭和五年から一二年、及び「伺綴」昭和一二年から二〇年

デジタル化）があるので、申請して閲覧してみました。
細かい庶務事項の伺いなのですが、この中に、毎年の例

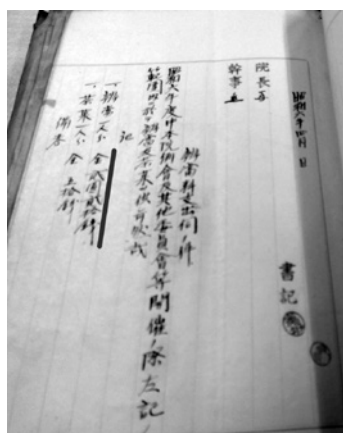


⑥同上中「弁当並びに茶菓料支出伺の件」（昭和五年三月一四日）

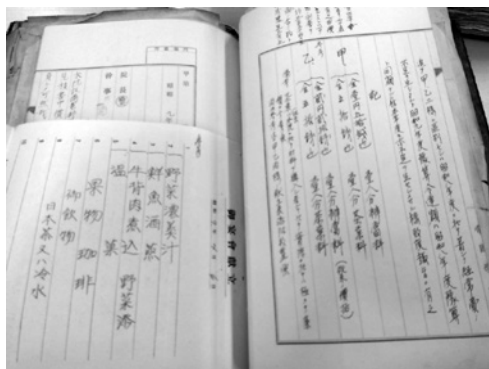
会時の弁当代についての書類がありました。食べ物のこと
なので、ついつい気になってしまいます。どれどれ。

⑥は昭和五年三月の例会時の会員への弁当と茶菓の発注
のための伺いで、右ページを見ると櫻井院長まで花押を押
しています。この時の弁当は二円五十銭です。このころ阪
急百貨店のライスカレーが二五銭だそうですから、その十
倍。まずまずのメシを食っているようです。ところが、⑦
にあるとおり昭和六年には二円二〇銭になり、さらに、⑧
は昭和七年の決裁ですが、右ページにあるように二案示さ
れており、

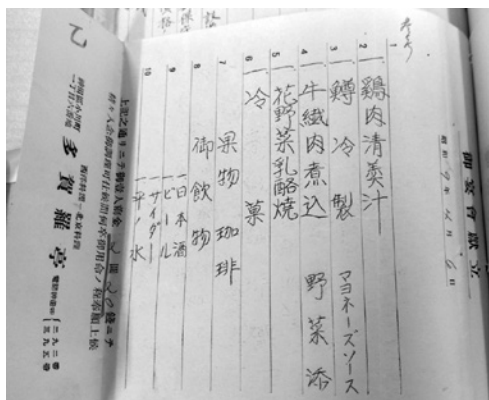
甲案 一円五十銭
乙案 二円二十銭（つまり前年度同）
で左にはさまれているのが甲案の献立。四品です。



⑦同上中「弁当料支出伺の件」（昭和六年四月（日付空白））



⑧同上「弁当料支出伺の件」(昭和七年四月)



⑨同上



⑩現在の日本学士院(筆者撮影)。敷地は変わっていないようですが、建物は建替えられています。このどこかに防空壕の跡地があるはずですが。

⑨が乙案。前年と同じ値段。五品あります。おかずの品数はともかく、「お飲み物」を見てください。甲案(⑧)は「日本茶又ハ冷水」ですが、乙案(⑨)は「日本酒、ビール、サイダー、平ノ水」です。

この二案のうち、乙は参考とされており、決裁は甲案となりました。濱口内閣の行政財政改革のあおりを受けたものと思われませんが、えらい先生たちなんですから、ビールぐらいつけてやってほしいではありませんか。

ちなみにこの「諸伺」綴りは、そのほかにも、印刷費や

職員超勤時のまかない代金(これは一人一食二五銭で計算されています)、し尿汲み取りの決裁、ゴミ収集、あるいは盗難が増えているので鍵を取り付けるとか、実に日常的な事項についての決裁が綴られています。こんな件まで院長(昭和一二年からは長岡半太郎^{ながおかはんたろう})はどんな気持ちで決裁していたのか。綴りの最後は、昭和二〇年秋の敷地内の防空壕の取り壊し作業の発注伺いです。いずれにしろ、えらい先生たちの世界ですから、若い研究者にとつてはちよつと「楽園」とは言いづらいと思います。

学術研究会議

一方、第一次世界大戦によってドイツの科学覇権が崩壊し、英仏を中心に国際学術研究会議が結成され、これへの参加を求められて、日本も⑪により大正九（一九二〇）年に学術研究会議を立ち上げ、これを通じて国際学術事業に



⑪「公文類聚」四四・大正九年・第五卷「官職四」「官制四」中「学術研究会議官制ヲ定ム」（大正九年八月一四日閣議）（公布は八月二五日）

参加するとともに、国内における研究支援の配分を行うことになりました。

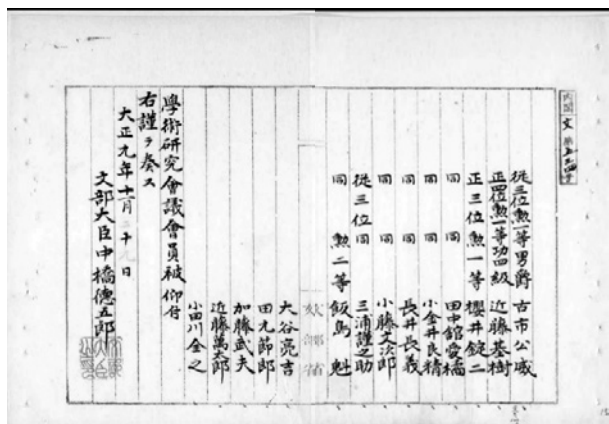
閣議請議は文部大臣・中橋徳五郎さん。加賀出身の官僚、大阪商船社長、大阪市議会議長。政友会の大物の一人。本会議は、「大正七年のロンドン及びパリで開催された連合学士院代表者の会議に於いて決議せられたる万国学術研究



⑫同上。請議書、官制条文。

会議組織の旨趣^{ししゅ}に基づき我国においても組織するもの」だそうです。

官制はあちこち直した跡がありますが、会員は一〇〇人以上、会長・副会長を互選する、総務部と學術部（数種）を置く、総務部長は副会長が兼ねる、などが決められています。実際には、十一月二十九日に会員（会長含む）九四人



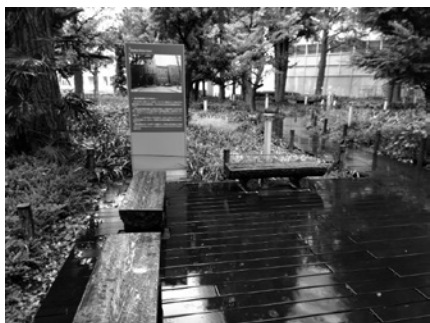
⑬任免裁可書・大正九年・任免第四七中「男爵古市公威外九十三名學術研究会議會員被仰付ノ件」

が任命^{にんめい}（⑬）されていますが、原則自然科学者から構成されました。

⑬は途中の「八十人」を省略して最初と最後のページだけ取り出してみたので一人だけですが、例えば一番最後の小田川全之さん^{おだがわまさゆき}はもともと幕臣の息子で鉱学博士、足尾鉱山の鉱業技術者、近藤萬太郎^{こんどうまんたろう}は農学博士、大原植物研究所長、加藤武夫^{かとうたけお}は理学博士、火山・地質の研究者で帝大教授（後に理学部長）など、一人一人が日本の知的財産を作ってきた開拓者のような人たちです。この会議は、やがて第二次大戦末期には、人文科学を加え、会員七〇〇人に膨れ上がります。戦時研究や研究費配分に関わり、研究分野間の争いの場なので、「樂園」とは言いがたいかも知れません。

「栄光」の理化学研究所

秋の雨のそば降る中、一〇月の半ばに、都内文京区の理化学研究所跡地に行ってみました。理化学研究所は、大正六年発足、所長は菊池大麓^{きくちだいりく}、古市公威^{ふるいちこうい}を経て大正一〇年から子爵・大河内正敏^{おおこうちまさとし}。父は大多喜藩主、幕府軍総督として鳥羽伏見戦の巨魁とされた松平正質^{まつだいらまさただ}で、遠縁の三河吉田藩主・大河内家を嗣ぐ。大正天皇の御学友、東京帝大工学部教授、貴族院議員。同じように東大教授兼理研究員だった寺田寅彦^{てらたけらひこ}の親友だというとし柔らかいイメージが出来ますでしょうか。狩猟や料理（食べるのも作るのも）と仕事



⑭理研跡地写真（筆者撮影）



⑮「写真週報」九号（一三年四月三日）（最終ページ見開）。「理研」の「理」の字に十字のマークが入っていて、おしゃれではありませんか。

特に大河内の所長就任以降、自由な雰囲気と潤沢な資金（発明品の製造・販売まで系列企業で行い、その利益を研究費に回す）によって多くの功績（例えば⑮「理研ビタミン」）をあげ、人材を輩出することになります。科学者以

が大好きで、年中あちこちを飛び回っている「おとのさま」です。理化学研究所の発展、引いては日本の科学に現代まで続く大きな影響を与えていると言われるすごい人物です。

彼の指導のもと、昭和七年、朝永さんが赴任した理化学研究所は、

まことに自由な雰囲気である。・・・実に何もかもものびのびとしていた。たとえば金の面ではこうである。（「科学者の自由な樂園」）

伝票さえ切れば資材を買い放題、だとか、予算を年度末に余らせても予算を切られることはない。お金のことは大

事ですが、上の者も若い者も自由に討論できるとか人事面での柔軟さなど、なるほど当時の帝国大学はこんな制度はなかったのだろう、と思わされます。

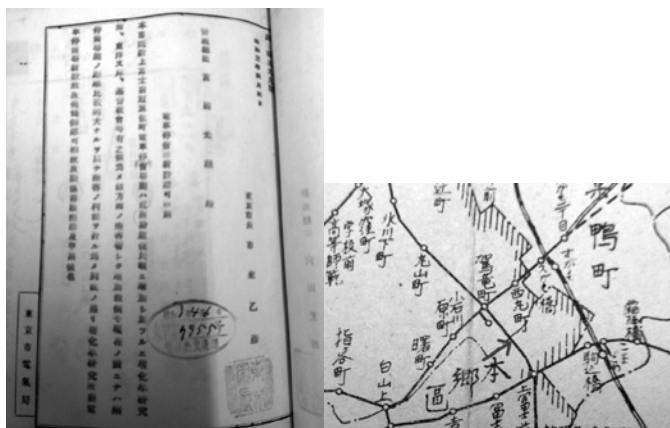
理化学研究所（現在は国立研究所法人）は、昭和四二年に埼玉県和光市に移転。駒込の建物は長く残っていました。が、今は高層ビルやマンションに様変わりし、一画に⑭の記念パネルが遺されています。

みずさわひかり

水沢光さん（後述）の簡潔なまとめをさらにまとめて引

用すると、理化学研究所は、「高峰^{たかね}譲吉が^{たかね}大正一三年に一時期帰国した際に、新研究所の設立を提案したこと」を端緒に、「渋沢^{しぶさわ}栄一^{えいいち}の賛同を得て、政財界や研究者の協力のもとで具体化し」「一九一五年末には民間

からの寄付金五〇〇万円、政府補助金二〇〇円、皇室からの下賜金一〇〇円で設立する案がまとまり、「一九一七年に設立されたもの、ということになります。

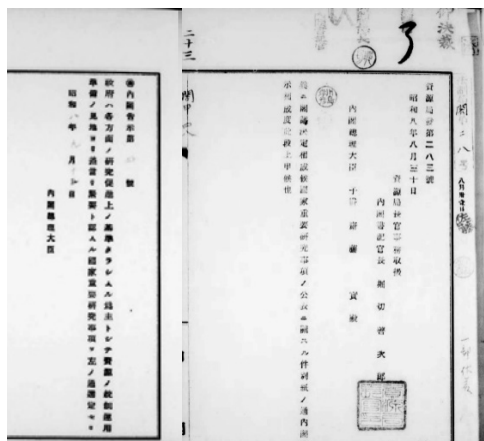


⑬「鉄道省文書」 昭和三年・巻卅二・地方鉄道及軌道三・軌道「東京市営電車」中「電車停車場新設出願・理化学研究所前（昭和三年四月四日）」

外にも、リコー創業者・市村清、後の内閣総理大臣・田中角栄^{いちむらきよし}からも系列会社で大河内の薫陶を受けています。「理研」は都内でも有名な施設となり、昭和三年には都電の停留所名にもなりました（⑬）。

資源委員会と資源局

昭和二年に内閣に資源局と資源委員会が設置されています。第一次世界大戦で必要性が明らかになった戦時の国家総動員のための準備機関と位置づけられたものです。昭和八年に「国家重要研究事項」を告示しています。



⑭「公文類聚」第五十七・昭和八年第一巻「皇室・政綱門」中「国家重要研究事項を選定す」

この告示で、「特殊鋼に関する研究」をはじめ、四十件の「国家重要研究事項」が定められました。（⑭）

重要研究事項	
一	特殊鋼・鋼鉄の研究
二	特殊合金・鋼の研究
三	特殊鋼・鋼鉄の研究
四	特殊鋼・鋼鉄の研究
五	特殊鋼・鋼鉄の研究
六	特殊鋼・鋼鉄の研究
七	特殊鋼・鋼鉄の研究
八	特殊鋼・鋼鉄の研究
九	特殊鋼・鋼鉄の研究
一〇	特殊鋼・鋼鉄の研究
一一	特殊鋼・鋼鉄の研究
一二	特殊鋼・鋼鉄の研究
一三	特殊鋼・鋼鉄の研究
一四	特殊鋼・鋼鉄の研究
一五	特殊鋼・鋼鉄の研究
一六	特殊鋼・鋼鉄の研究
一七	特殊鋼・鋼鉄の研究
一八	特殊鋼・鋼鉄の研究
一九	特殊鋼・鋼鉄の研究
二〇	特殊鋼・鋼鉄の研究
二一	特殊鋼・鋼鉄の研究
二二	特殊鋼・鋼鉄の研究
二三	特殊鋼・鋼鉄の研究
二四	特殊鋼・鋼鉄の研究
二五	特殊鋼・鋼鉄の研究
二六	特殊鋼・鋼鉄の研究
二七	特殊鋼・鋼鉄の研究
二八	特殊鋼・鋼鉄の研究
二九	特殊鋼・鋼鉄の研究
三〇	特殊鋼・鋼鉄の研究
三一	特殊鋼・鋼鉄の研究
三二	特殊鋼・鋼鉄の研究
三三	特殊鋼・鋼鉄の研究
三四	特殊鋼・鋼鉄の研究
三五	特殊鋼・鋼鉄の研究
三六	特殊鋼・鋼鉄の研究
三七	特殊鋼・鋼鉄の研究
三八	特殊鋼・鋼鉄の研究
三九	特殊鋼・鋼鉄の研究
四〇	特殊鋼・鋼鉄の研究

⑱同上「重要研究事項」項目。

タングステンやX線や航空機エンジン、光電通信、テレビジョン・トーキー、写真伝送（要するにファクシミリ）など確かに重要そうなのが多くあります。昭和八年段階でこんなことがもう具体化しつつあったんですね。
ところで、⑰の右肩の「御決裁」、気になる名前がありませんか。(19)



⑲ ⑰の一部

「内閣総理大臣」は齋藤実さんですが既に承知しているからでしょう、「了」。真ん中は内閣書記官長・堀切善次郎、後に戦後の幣原内閣の内務大臣として、GHQより先に婦人参政権を提案したひとです。その左、内閣書記官の下に押しているのは内閣総務課長・内閣書記官の川嶋孝彦さん（ハンコは「川島」になってますね）。この後、内閣統計局長になって、昭和十五年の国勢調査や戦後のGHQとのやりとりなど、戦中から戦後の日本統計の実務を引っ

張った人です。ちなみに、このひとの息子さんが学習院大学名誉教授だった川嶋辰彦さん。・・・ということは、この人の曾孫は？

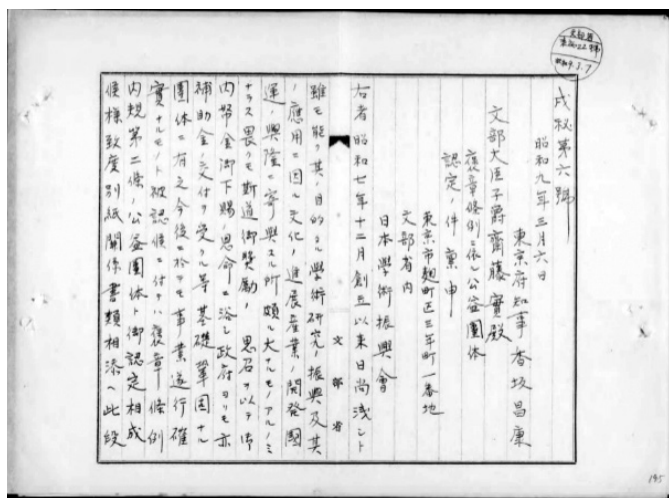
日本学術振興会

⑱の国家重要研究事項は、研究補助金の選定基準になることもイメージして各大学等の意見を聴取して作られたものですが、研究補助は別途設けられた日本学術振興会の仕事という構想になっていました。日本学術振興会は、民間寄附金が集まらないなど、いつものとおり？の財政上の問題があるのですが（この国の人はあんまり科学にお金を出す気はないんです）、昭和七年、皇室下賜金を中心に設立されます。

⑳は、学術振興会が、団体に寄附すると褒章が受けられる公益団体として認定してほしい、と東京府知事を通して申し出たものです。「稟」はもともと穀物倉庫のことですが、「申しあげる」の意味があります。これを見ると、住所が文部省内にあっておそらく「丸抱え」なのだろうというところ、また、左側ページの四行目に、
畏くも斯道御奨励の思召しを以て御内帑金御下賜の
恩命に浴し、政府よりもまた補助金の交付を受ける等基礎
鞏固なる団体に有之。

とあって、皇室下賜金と補助金から（なんとか）成り立つ

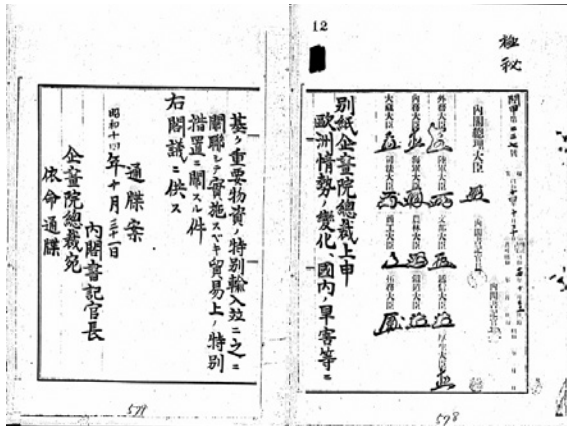
ているらしいことがわかります。それにしても、学術研究振興が「斯道御奨励」というのも驚きですが、文部大臣に提出する文書を「文部省」の用紙に書いているのも、今なら怪しからんですね。



⑳大正十二年～昭和十一年「認定公益団体」中「日本学術振興会を公益団体と認定」中の東京府より文部大臣あて昭和九年三月六日付け「褒章條例に係る公益団体認定の件稟申日本学術振興会」

第二次世界大戦がはじまった

昭和九年に中間子理論を発表した湯川さんは、昭和一四（一九三九）年八月、理研の旅費でブリュッセルでの国際会議に出かけます。現地で前々年からライプチヒに留学に



- ②「公文別録」内閣・大正一二年～昭和一九年第二巻「昭和一二年～」中「歐洲情勢ノ變化、國內ノ早害等ニ基ク重要物資ノ特別輸入並ニ之ニ関連シテ実施スベキ貿易上ノ特別措置ニ關スル件」（昭和一四年十月三〇日閣議）。在任期間が短いので貴重な花押になりますが、内閣総理大臣は阿部信行さん。外務大臣の「つる三ハ」みたいな花押が気になります。なりませんか。これは野村吉三郎。「のむら」と書いてあるようです。

来ていた朝永さんと再会。ところが二人は、大使館から、荷物をまとめてすぐに日本船に乗船するよう指示されました。二人が乗船した靖国丸は八月中にドイツからノルウェーに回航、九月四日に出航して日本に向かいます。九月一日に、後に「物理学者の戦争」と言われるようになる第二次世界大戦がはじまったからです。②は閣議において「欧州情勢」に対処するため、コメや希少鉱物、薬品の緊急輸入を決めています。この年は干害だったんですね。まだ、これが第二次世界大戦とよばれる大事件の開始とは思わず、対岸のでかい火事のイメージでしょうか。

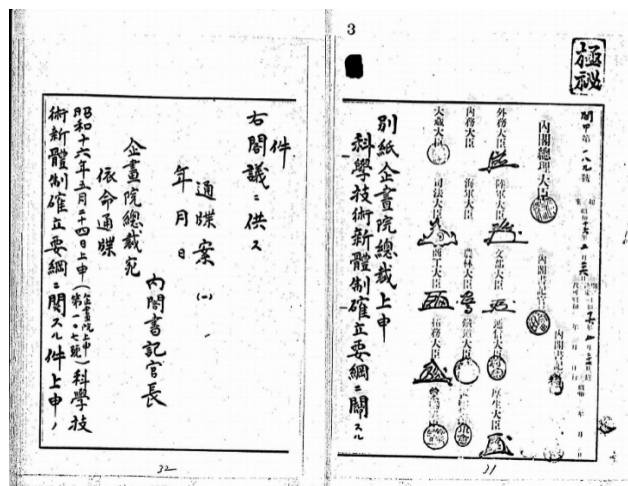
新体制確立

昭和一六年、企画院（昭和一二年に企画庁と資源局を吸収して設置）での検討に基づき、近衛内閣の新体制運動の一環として「科学技術新体制確立要綱」が策定（②）されました。同要綱に基づき「技術院」が設立され、いよいよ本格的な「科学動員」と言われる時代に入っていきます。

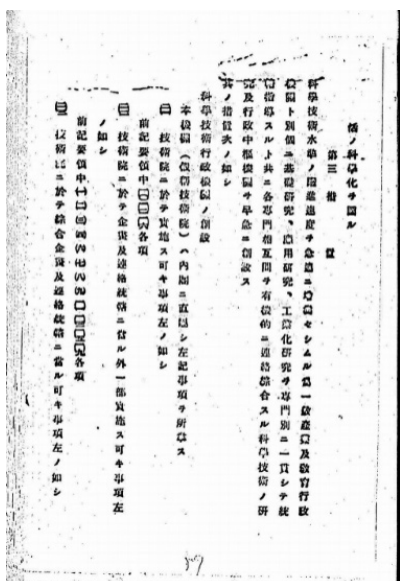
③の真ん中あたりに、「本機関（仮称技術院）は内閣に直屬し左記事項を所掌す」とあります。これを受けて翌一七年一月に技術院設立。この設立まで奮闘してきたのが企画院次長の宮本武之輔です。各省の技術系高等官の地位向上と行政への科学的思考の導入を求めた「技官運動」の中心的人物で、技術者としては信濃川の治水などに活躍した



②—2 六月一〇日の別件の花押もこうなってますね。



②「公文別録」内閣・大正一二～昭和一九・第四卷「昭和一六～一七年」中「科学技術新体制確立要綱二関スル件」（昭和一六年五月二六日閣議）。司法大臣・風見章の花押が気になります。なんだろう、これは。



②②閣議決定中「科学技術行政機関の創設」部分

人ですが、彼自身は一六年年末に急死してしまいました。四九歳。当時理研に在籍していた武見太郎（後の日本医師会長）らの看取る中、

——余りに明瞭に「議論する場合ではない、実行だ！」の言葉を最後にして瞑目してしまったのである。

と、当時の興亜院調査課長で鉄道省技師、戦後は建材試験センター会長などを勤めた笹森異（ささのもろ）さんが書きのこしています。この人をはじめ、松前正義、篠原登ら宮本武之輔とともに働いた技術者の活躍をさらに追いかけたと思います。・・・が、今回は断念。

科学技術総動員

現在立命館大学の教授をしておられる水沢光さん^{みずさわひかり}が、国立公文書館アジア歴史資料センターの研究員時代にまとめられた『日本の戦時科学技術動員体制』に、総動員施策をうまく四つに分類してくれています。

(一) 軍産学連携の推進

技術院が調整した航空機技術研究などがこれに当たります。

(二) 幅広い科学研究の振興

科学研究費交付金制度を開始します。現代の「科学研究費補助金」につながる政策ですが、この交付金などで活動した日本学術振興会の「パラオ熱帯生物研究所」こそ「研究だけに打ち込めた」「美しい緑のパラダイス」と元所員が評価する科学者の楽園だった……。しかし、一方には少人数での共同生活や研究結果が出ないと内地に戻れないなど、「緑の牢獄」と評するひともいたようです。(坂野徹『島の科学者』)

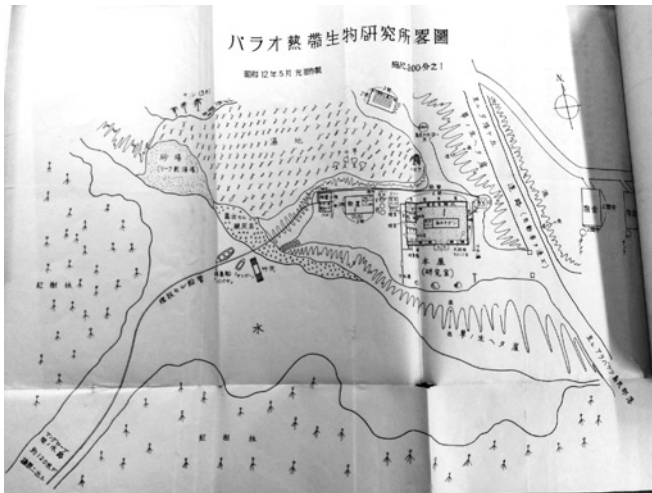
②④の図は、上述の坂野徹さんの本にも引かれていないものです。デジタル化されればもっとみんな利用できるのに。

(三) プロジェクト型の研究開発

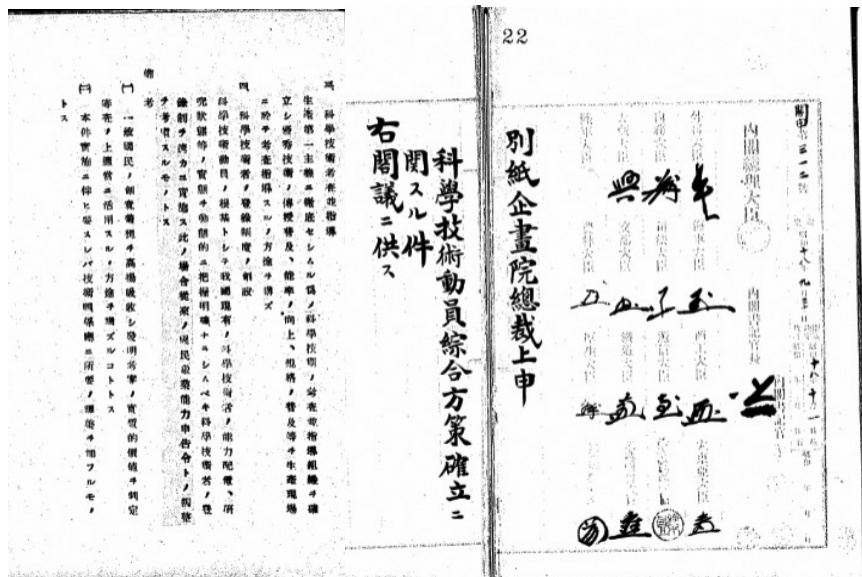
欧米(ドイツ含む)の科学動員はこの形をとること

が多かったようです(原爆のマンハッタン計画など)が、日本では各省間の調整といった問題があり、主流にはならなかったようです。「超大型飛行艇」などを検討した、ということなのですが。

(四) 一般国民から発明募集



②④「文部省」第二教育門三ノ十四ノ二「日本学術振興会」中「熱帯生物研究所建物及びその他設備寄附承認に関する件」(昭和三年八月一日決裁)中、研究所略図(筆者撮影)



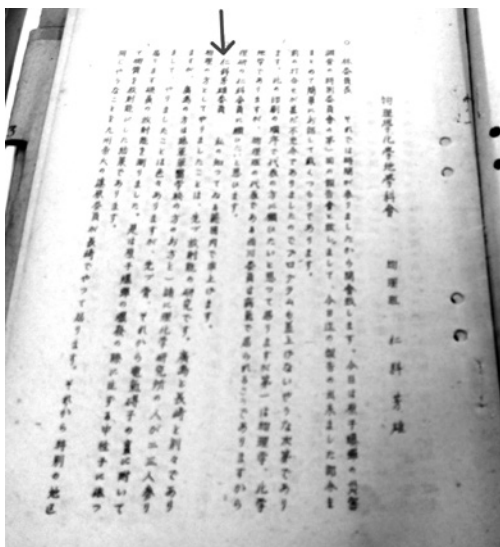
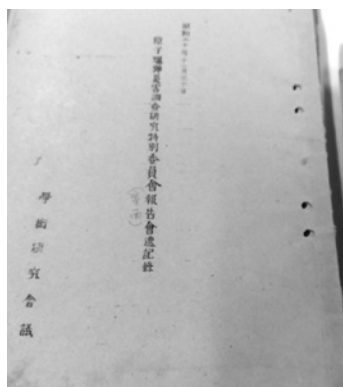
②⑤「公文別録」内閣・企画院上申書類昭和一五年～一八年第三卷「昭和一八年」中「科学技術動員綜合方策確立ニ関スル件」（一八年一〇月一日閣議）

はじめ

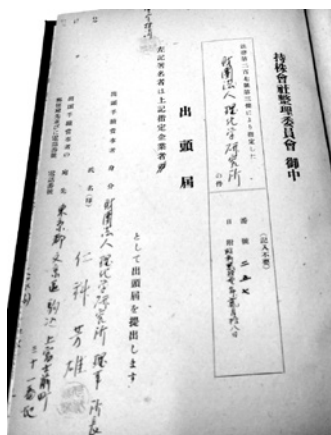
星製薬創業者で戦中の衆議院議員・星一さん（作家の星新一の父）の建議によつて開始されたものです。②⑤の閣議決定を見てください。左端から四行目、「一般国民の創意着想を高揚吸収し発明考案の実質的価値を判定審査の上適当に活用するの方策を講ずることとす」とあります。終戦までに約二万件の応募があったと推定されていますが、提案はほとんど実らなかったといわれます。それにしてもな

原爆調査

昭和二〇年八月、戦時中いわゆる「二号兵器」（新型爆弾）の研究に従事していたといわれる仁科芳雄さん（理化学研究所に陸軍からの依頼書が遺っているとのこと）ですが、八月七日、陸軍航空本部からの要請で広島へ（一度引き返したため、広島入りは八日）。仁科以外にも、次々と各大学や研究所から調査班が広島・長崎に入りました。その後、学術研究会議は、九月一四日から、仁科をふくむ原子爆弾災害調査特別委員会を設置し、調査結果を報告しています。学術研究会議の研究者たちは、科学が「楽園」ではなく「地獄」を作り出すことができることを、世界で初めて確認した科学者になったようです。②⑥の矢印部分は仁科芳雄委員の報告。



②⑥「戦争裁判参考資料」連合国側の不当行為その四「原爆都市爆撃機雷敷設」中「原子爆弾災害調査研究特別委員会報告会速記録（第一回）（二〇年十一月三〇日）学術研究会」。この資料は平成一一年に法務省から移管されたもの。



②⑦「集排法手続記録」（二五四）「財団法人理化学研究所関係」中「出頭届」、提出資料

理化学研究所の運命

朝永さんに「楽園」だったと回想された理化学研究所で、すが、終戦後、過度経済集中排除法の適用を受けることに

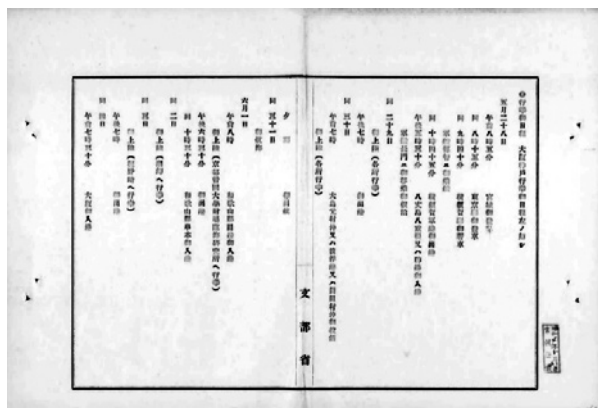
なり、戦犯容疑で収監（後釈放）された大河内さんから引き継いだ仁科所長が持株会社整理委員会に呼び出されています（27）。昭和二年二月一八日、整理委員会に出頭した仁科所長の申し立ては、理研は株式会社科学研究所になること、保有株式は原則手放すことにしていることから、排除手続は必要がない、ということで、翌年に「指定取り消し」されました。ただし、株式会社科学研究所は、仁科所長の没後、解散もやむを得ない状況になります。

このほか昭和二〇年の九月に技術院は軍需省とともに廃止。昭和二二年、学術研究体制刷新委員会が発足し、その報告に基づいて、昭和二四年日本学術会議が発足（学術研究会議は廃止）、帝国学士院はその附属機関「日本学士院」になります。同年、湯川秀樹ノーベル賞受賞。朝永振一郎の受賞は昭和四〇（一九六五）年。ずっと先になります。この間のお話はまたいづれ。

科学者の楽園は何処に

終戦後のある日、私（当時の大蔵大臣で民俗学者の瀧澤敬三^{けいぞう}です）は陛下に拝謁を賜った際、談たまたま南方先生（博物学者、南方熊楠^{みなみくたか}）のことに言及しました所、・・・ニコニコされながら、「南方には面白いことがあったよ。長門に來た折、珍しい田辺付近産の動植物の標本を献上されたがね。普通献上といふと桐の箱が何かに入れて来るのだ

が、南方はキャラメルキャラメルのボール箱に入れて来てね。それでいいじゃないか」と仰せられた。（笠井清「南方熊楠」）
湯川・朝永が大学を卒業した昭和四年に戻ります。この年、昭和天皇は28にありますとおり、伊豆大島、八丈島、大阪、神戸と併せて、御召艦「長門」に乗船されて南紀行幸を執り行いました。



28 「文部省」昭和四年行幸啓及び恩賜・大阪神戸行幸第一冊・行幸御日程「天皇陛下大阪神戸へ行幸関係書類」中「四年五月一七日付 宮内省告示第二一号」（行幸御日程）

六月一日に「午前八時 和歌山県田辺港入港、御上陸
京都帝国大学附属臨海研究所へ行幸 午後六時三十分 御
出港」とあります。

へー、ずいぶん長く研究所におられたんですね、と思っ
てしましますが、この時、陛下は、御昼食の後お召換え（こ
こまでは大元帥の軍服で沿道の歡迎者の前を通られた、こ
こで平服に御着替え）、午後二時ごろ、

御座船で（田辺湾の）^{かしま}神島に渡られた。熊楠は（水産試
験場の）ボートに乗り、神島の西方でお待ちしていると、
早や間近に小さな御座船の上に、陛下の御姿をお見受けし
たので、謹んで敬意を表すると、陛下にも中折帽を取られ
て丁重に御挨拶があった・・・（同上）

昭和天皇は、無人島である神島に向かわれて、南方熊楠
と面会していたのです。その後、熊楠は長門に招かれ、珍
種の生物の標本を見せながらご進講した。側に海軍のトッ
プである加藤寛治軍令部長が控えているが、実は少尉時代
の加藤と熊楠はロンドンでの旧知の仲、加藤は後日、熊楠
に「相変わらず神氣満身の御風格」と手紙を送っているそ
うです。この時にキャラメル箱に標本を入れて持ってきた、
「それでいいじゃないか」というのが昭和天皇の回顧
です（一〇個入りの小さいのを思い浮かべてはいけません。
ボール箱というのは、もっと大きいのです）。

この行幸、別に秘密の行動ではなく、翌日の新聞にも「南

方翁」の活躍を大きく扱っています。

(29)



②9昭和四年六月二日大阪毎日新聞

ところで、近年、この昭和天皇の神島行幸を写した文部
省のフィルムが発見され、「南方熊楠記念館」のHPでも
見ることができます。ぜひ検索して御覧になってみてくだ
さい。若きロイヤルサイエンティストと在野の老学者の出
会い。老学者は緊張の面持ちから、一瞬にしてにこやかに
微笑んでいます。

「科学者の楽園」があったとすれば、この小さな島にそ
の時にあったように、制度ではなく人間と人間のふれあ
いの瞬間だけが生み出すものなのかも知れません。読者諸姉

兄は如何思われますか。

格物致知

③〇の右ページには「大学の八条目」といわれる学問の順番がずらずらと並んでいます、四行目三文字目から、

致知在格物

の五文字があります。

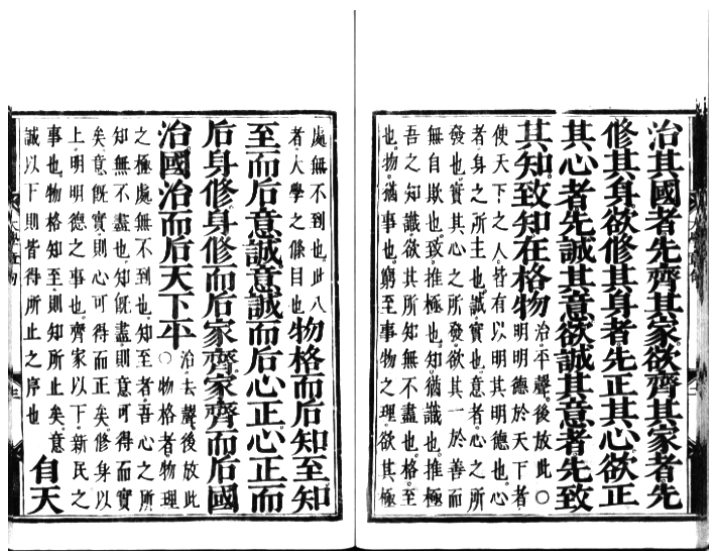
知を致すは物に格（いた）るに在り。

（天下を平らげるための学問の、その根源は、知識を究極まで押し広げることである。それは一つ一つの物事について、その持つ「理」を極めることで、成し遂げられる）

というのが、南宋の朱子の解釈。右ページ最後の行に「事物の理に窮め至り、その極むる処到らざる無きを欲するなり」と主知主義と評される彼の主張が展開されています。一九世紀、幕末・明治の俊才たちが、自然科学を「窮理の学」と訳した根拠です。

ところが、朱子から三〇〇年ぐら以後に、一人の青年が「物の理」を究めようとしてまず「竹」の研究を始めた。来る日も来る日も竹を見つめて、その「理」について考えているうちに、青年は、ある日、突然刀を抜いて、竹と周囲の人たちに襲い掛かって取り押さえられた。

青年はさらに数年して、ついに気がついた（「龍場大悟」といいます）。



③〇寛文七年（一六七七）、日本で刊行された朱子の「四書集注」です。国立公文書館には貴重な元版の「四書集注」も入っていますが、こちらの方が写真がきれいなのでこちらを紹介しておきます。



福井 ひとし (ふくい・ひとし) 氏

一九六二年三重県生、東京大学法学部卒、八五年から総務庁、内閣官房、復興庁、沖縄総合事務局等に勤務。内閣府参事官として公文書管理法の制定に参画、その後、福岡大学教授、内閣審議官、国立公文書館理事、日本学術会議事務局長、迎賓館長を経て、二〇二二年から国立公文書館で首席研究官。役人時代、国会予算委員会で答弁、総理と米大統領を先導、そして今、両憲法の原本と毎日一緒に暮らしている、のが人生三大レガシー！（イラストも筆者）

「致知在格物」

は、
知を致すは物を格す
に在り。

と読むべきなのだ。

この「知」はただの知識ではなく、人間が誰しももたら持っている「良知」のこと、一つ一つの物事の正しい状態をこちらから「作りだす」ことによって、良知は完成するのだ、と。

この青年が王陽明です。朱子の客観的な態度の方が科学的かとは思いますが、もしかしたら、王陽明は、「不確定性原理」を先取りしていたのでは——と、トンでもなことを言い始めたところで、

今月はおしまいにさせていただきます。

（参考資料）

廣重徹「科学の社会史 近代日本の科学体制」（一九七三 中央公論社）

自然選書

荒俣宏「大東亜科学綺譚」（一九九一 筑摩書房）

国立公文書館デジタルアーカイブ

国立公文書館アジア歴史資料センター（特にアジア歴史クロッサリー）

の四者をつなげてみよう、と思って今回の作業になりました。同じようなことをもう少し真面目にやられたのが

水沢光「日本の戦時科学技術動員体制—軍産学連携と研究助成の制度化—」（二〇二四吉川弘文館）

ではないかと思っています。たいへん役に立ちました。

このほか、本文中に引用したものを含め、

湯川秀樹「旅人 ある物理学者の回想」（一九六〇 角川文庫（二〇一

一 改版）

朝永振一郎「科学者の自由な楽園」（二〇〇〇 江沢洋編・岩波文庫）

湯川・朝永生誕百年企画展委員会編「素粒子の世界を拓く 湯川秀樹・

朝永振一郎の人と時代」（二〇〇六 京都大学学術出版）

宮崎市定「自跋集—東洋史学七十年—」（一九九六 岩波書店）

宮田親平「科学者たちの自由な楽園 栄光の理化学研究所」（一九八三

文藝春秋）

上山明博「仁科芳雄 「原爆を作ろうとした物理学者」がみたもの」（二

〇二五 青土社

坂野徹「島の科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究」(二

〇一九 勁草書房)

高崎哲郎「工人(エンジニア) 宮本武之輔の生涯」(一九九八 ダイヤ

モンド社)

笠井清「南方熊楠」(一九六七 吉川弘文館人物叢書)

伊藤憲二「励起 仁科芳雄と日本の現代物理学」(二〇二三 みすず書

房) はあちこち参考にさせていただきましたが、まだ読み切れてません。

※国立公文書館のみなさん、いつもありがとうございます。スペシャルサンクス。